虹彩法（虹の贈り物）

〈出逢い〉

一九九六年一〇月二八日、北海道スケッチ旅行をしていた霧多布岬でのこと。

その日は未明から、海に映った月明かりに見とれて、長い間夜の海の景色を楽しんでいた。

それは、天の高いところにあった月が、西の地平線へと沈み、東の水平線辺りが仄かに白みはじめたその頃であったと記憶している。

海も陸も三六〇度が真っ平らに見渡せるその場所で、境界線に沿って天球を包み込む虹を見た。

……虹は、空の一番高いところまでを淡い紫色に染め上げて、気がつくと、自分も風景も全てが虹に包まれていた。

『あー、これが自然を現す色なんだ!!』わたしは、そのとき、虹に包まれてゆくこの星をイメージしていた。

〈虹彩法〉

絵を描くといえば、デッサンからはじめて、その後に色を塗る……と考えるのが普通のことであり、色から描いて形を現す。と言えば、なにか奇異に感じられるかもしれません。

〝虹彩法〟と名付けたこの描法は、通常おこわれる描法とは違った観点に立ち、まず色を描いてゆくことから始めてゆきます。

なぜ色から描くのか？　と問われたら、それは、自然界の色彩には線というものが存在しないから。と答えることができます。

なぜなら――、観察している意識を、物の形から色彩に移行した途端、線と見えていたそこから、様々な色が現れ出てくる

ことになるからです。
線とは、物を捉えようとする人間の意識が作りだす概念であり、デッサンとは、「わたしは、物を、このように捉えている」と、表明することに他なりません。

つまり、『線』と『色』は、対照的な関係にあるものなのです。

そこでこの描法は、その色彩の方に意識の目を向けることで、今までおこなわれてきた絵画の方法に、新たな視点を提示できるのではないか。と考えています。

＊

雨上がりの大空に架かる虹は、なぜ人の気持ちを捉えて美しいのでしょう。

それは、『人の内面を表す色だから』と考えることは、夢物語の絵空事なのでしょうか。

自然界の中には、この鮮やかに輝く虹の色が、お互いを損なうことなく浸透し合い充ちている様子を観察することができます。

ここでいう〝虹の色〟とは、物質に着色した、あるいは定着した色を言うのではなくて、物質から自由になろうとする色を指して言います。

通常色といえば、物質に定着したものをいい、ここで使用するクレヨン（オイルクレヨン＝オイルパステル）も物質の色であるため、自然界に浸透したこの〝光の描く色〟を描き現すことはできません。

描いたものは、あくまでも物質的な色に過ぎません。

しかしこの物質の色は、人間の意識を介して物質性を越え出て精神性へと高まってゆくことができる。と、言うことができます。

ここでいう精神性とは、自然の物を観賞したり、芸術作品に触れて感動を覚えた経験をお持ちの方であれば、どなたでもご理解いただけるのではないかと思うのですが、敢(あ)えて言わせていただくならば、人は、目にした物に、物質では到底表現できないような事象を発見したときに、思いもしなかった感情が、心の奥底から湧き上がってくるのを感じます。

……つまり、心の震え（感動）を覚える。
そして、この震えが、物自体によって惹き起こされたのではなくて、その物の物質性を、なにものかが、精神的な高みに押し上げたために惹き起こされたのだ。と気付くことができます。
つまりそれは、取りも直さず、自分の意識の働きかけが、精神的な力（なにものか）の働きを、そこに見出したのだ。ということを。
そして、この、なにものかが〝光の描く色〟に関わってゆくのだ――と。

〝虹彩法〟は、この自然界にある、〝光の描く虹の色〟を、一色、一色、取り出すことからはじめてゆきます。
それは、自然界にある光の色彩が、絵の具のように混ざった状態で見えるのではなくて、一つ一つの色が、独立した状態で、

重なり合い浸透し合う姿になって見えてくる（和音のように）。という理由によります。

それは、自然界のありのままの現れであり、混ざってしまう色とは（混色した状態から元の独立した色として取りだせなくなるのは）、絵の具の持つ特性である。と言うことができます。

ようするに、自然界にある〝光の描く虹の色〟が、あらゆるところに重なり合った姿で現れるので、先ずは、その一色一色を識別することから観察をはじめましょう。というわけです。

＊

わたしたちが普段何気なく見ている風景の中には、実に様々の色を観察することができます。

そしてそこには、通常、平面的に現される色とは違う、奥行きや運動といった要素も現れています。

それは、遠近法的な奥行きでもなく、筆の捌(さば)きによる動きでもない、

たとえば、一枚の葉っぱの中には、葉っぱの厚みをはるかにしのぐ色の深さが観察できますし、大気の中に移ろう、色彩の変化を観察することができます。

また、人工の照明によって作られる影の色と、太陽光線の作る影の色を比較すると、太陽の作りだす影の中では、虹の色が実にバランスを保った鮮やかな姿として観察されるのに対して、人工の光の作りだす影の中では、色と色の浸食とも思える、バランスを欠いた混ぜ合わさったような姿が観察されます。

＊

自然界の色彩からは多くのことを学ぶことができます。しかし、その姿を描き現そうとしても、観察の当初は、それら虹の色が沈黙したまま何も語ろうとしない。と、感じられるに違いありません。

それは、自然界の色彩が、シンプルに見えながらも複雑に重なり合いしかも移ろいやすく、わたしたちの目が、その動きについてゆくことに全く慣れていないから……、という理由によります。

空を見上げてじっと観察していると、この自然界に見る色の深さとは、個々の色たちの個性の重なり合いによって作りだされる現象であり、動きとは、それら色と色とが、触れ合い、ぶつかり合う際に、高揚し、衰退し、生成し、壊れゆく、瞬間瞬間に繰り広げられてゆくドラマなのだ。と認識するとき、やがて、肉眼で見る物質よりももっともっと緻密で繊細な粒子が見えはじめてきて……、自然界には、このような出来事が満ち溢れていて、そこに触れたときに、わたしたちは感動を覚えるのではないか！　との思いが、胸の高鳴りとともに空高く舞い上がる翼になるのを覚えるのであります。

このように、神秘に包まれた自然界の色彩に思いを馳せながら、観察と描写を繰り返し試みて、色彩の本質であるものに近づいてゆきたいと考えます。

〈自然界の色彩〉

自然界の色彩は観察する者によっても見え方が異なってくる。――という事実を、スケッチ会の現場で教えられます。

また、止まることなく活動する自然界の色彩は、移ろいやすい自分自身の意識にも似ている。――と、観察が進むにつれ、そのように感じられてもきます。

だからといって、そのことで、描くことが容易になるわけではありません。

逆に慣れは、自分の思い込みに走ってしまい、画面上の色彩がにっちもさっちも行き場を失って濁らせてしまったり、あるいは、それまでの壁であったものが突然取り払われたように感

じて、まったく違った世界観に逸り、それまでの手法を一新したことで自分の今いる地点が分からなくなって行き詰まる。といったことになりかねません。

そのため、制作しながら惹き付けてしまうそのような囚われを、一一吟味しながら排除してゆく、注意力と判断力が、常に求められることになります。

自然界の虹の色は、自分が青を欲すれば青が現れ、黄色を欲すれば黄色が現れ、赤を欲すれば赤が現れ、といった具合に、自分の内面に依存した姿となって表れてきます。

そのため、描き手が自分の考えでもって、空は青以外の色であってはならない。とか、太陽は黄色以外の色であってはならない。とか、いやいや、太陽は赤でなければならない。と、決めつけてしまうと、人と人とのコミュニケーション自体を悪くしてしまい、自然の姿とは別に、人間関係の方に頭を悩まさな

ければならなくなってしまいます。

実際、こんな話を聞いたことがあります。

ある人が小学生の時分、学校の絵の授業の最中に空を見ていたら、そこに黄色を発見して、空全体に黄色を描いたのだそうです。

すると先生から、空の色は青色である。と、みんなの前で注意を受けてしまい、そのときから、絵を描くことに大変な苦手意識を持つようになった。ということでした。

同じような経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないかと思うのですが。

このことは、まったくもって由々しき問題であります。

しかし……もしもそのときに、その方の観察が空だけに止まらず風景全体にまで及んで――、そのとき、『黄色も、青も、赤も、紫も……、ピンクやオレンジや、いや、もっともっとたくさんの色たちが、空や、海や、山や、そして野の草花や虫や鳥や月や星々までも照らして、輝いている！』ことが発見されていたら、苦手意識は、密やかな楽しみへと替わっていたのかもしれません。

空を例にあげれば、日中の青く輝く空全体であったり、あるいは、白くはっきりと浮かんだ雲であったり、霞（かすみ）がかったグレーの雲の中であったりと、様々ではありますが、普段空の中に見慣れた、青や白や灰色っぽい色の中に身を潜める、黄色や、紫や、ピンクや、オレンジといった色たちが、ところにより鮮やかに、ところにより緩やかに輝いているのが観察できます。

その現れ方は実に捉えようがなく、時間帯や季節、大気の状態にもよりますが、観察している、その人のそのときの気分によっても変わる。……としか言いようがないほど、まるで生き物のように変化するそれらの色たちを観察することができます。

日の出前……、夜の帳（とばり）が白みはじめて一日の幕が開かれてゆきます。

明るさは、黄色味を帯びながら、徐々に夜の帳の中へと浸入し、同時に、退潮する暗がりの中から鮮やかな青が姿を現します。

明るさは、空全体を包み込むように広がり、一日のその清ら

かなはじまりが、喜びに溢れるエネルギーに充たされてゆく……と、感じることができます。

見る見る高まりゆく明るさは、やがて昇りくるものを称えるように水平線辺りを赤みがかった色に染め上げてゆくと、訪れる者に道を譲るかのように、あるいは、生まれくる者を息を潜めて待つかのように……突然静まる。と、静寂を割る轟きと共に、遂に、色彩の根本である放射する光が……、厳かにその姿を現しはじめる。

このときの日の出の風景と、夕暮れどきの風景を写真に撮って比べても、大した違いは感じられないかもしれません。しかし、この両方を、じっくり観察しながら絵を描くと、その違いは歴然となる。

朝日を描くと元気を貰う。「もう一枚描きたい」という気分になれる。

しかし、夕陽を描くと、ぐったりと疲れる。

そしてそのときに、朝を染め上げてゆく黄色と、夕暮れを染めてゆく紫色を、視ることになります。

しかしこの色は、普段わたしたちが見ている色や、写真で捉えることのできる色とは性質が異なります。

言うならば、〝生命感覚〟で見ている（捉えている）とでもいうべき性質のもので、

朝の清々しい気分。

夕の物憂（ものう）げな気分。

そのように、内的に感じられる色なのです。

……つまり、朝の色、夕の色という〝時〟に応じた〝基調となる色〟のあることを体験します。

これを仮に、〝時の色〟と呼ぶことにします。

この〝時の色〟の一日の変化に注目すると、オレンジ色に染められてゆく朝焼けの色は、背後に黄色という基調の色を持ち、その明るさによって、朝が導かれてゆくのが感じられます。

やがて明るさは、徐々に強さを増しながらその基調をオレンジ色に換え、日中の、一番陽の高くなる頃には、焼けるような輝き（明るさ）の中に、〝赤〟本来の姿である〝最大の生成と最大の破壊〟を持つエネルギーを感じることができます。

こうして、一日の移り変わりの中で最高潮に達した〝時の

色〟は、その強い陽射しの中に徐々に影の色を交えながら、黄昏時には、哀しみにも似た慈しみに溢れるパープル（赤紫）に包まれてゆき、日没の頃、西の空を染め上げる茜色の中に、懐深い紫の浸透を感じることができます。

こうして、陽の光が退潮してゆく中、やがてどこまでも深い群青が姿を現し、時を、青く深く沈めながら、夜独特の活動がはじまります。

やがて、闇の深さが充ちて夜の活動も終わりに近づくころ、閉じゆく闇の中に身を沈めていた、緑が姿を現し、夜の帳は、新たな朝に迎えられてゆきます――

このように、それぞれの基調の色が、それぞれの気分、つまり人間の感情と深く関わってゆくことを、自然の色を観察しな

がら強く感じます。
（しかも、その時々の〝時の色〟の中には、更なる虹色の変化が、幾重にも感じられる）

＊

さて、自然の光の中でのスケッチが進むにつれ、徐々に、大気に充ちている虹の色も観察されるようになり、やがて影の中に輝く色の様子も観ることができるようになります。

自然界の色彩は、明るい場所であっても暗い影の中であっても、緻密で透明な輝きに満ちています。

そして、このときの色は、先述したように、肉眼の奥にある〝生命感覚〟で観ているような見えかたで、肉眼よりもはるかに実感を伴って視えます。

このように書くと、何か、如何(いか)わしい話しではないのか？と、感じられるかもしれません。

しかしスケッチに来て、物の形に集中するのを止めて風景全体に焦点を広げるように観察をはじめると、概ねそのうちの何色かは直ちに観察できる。……ことを、スケッチ会の現場で確認しています。

特に、先にも例として挙げた、小学校低学年からそれ以下の年頃には、既成概念で固まった大人の頭とは違い、はるかに柔軟な感性で、それらの色を観察することができる。ことも確認しています。

例えば、ある観光名所に向かっていたとします。

そこで突然、目の前に広がる光景に一瞬息を呑む瞬間があったことを、（観光名所に限らず散歩の途中であったり）を、思い起こしていただきたいのですが、この瞬間には、囚われのない自然の色彩が肉眼を通り越して心の奥まで届いていた。ことが考えられるのですが、しかし、この〝光に溢れる色彩〟は、先にも触れたように、留めて観察することができません。

掴もうとした瞬間にはすでに取り逃がしてしまい、……もぬけの殻となった場所に、どこからか持ってきた、あるいは自分の作り上げたイメージでもって埋め合わせる。という状況になり、イメージが湧かない場合、感動はたちまち冷めてしまいます。

そしてそのとき、もし、『緑の色は黄色と青によって作られ

る』という概念でもって絵を描きだしたとすると、自然界の〝光の姿〟が、絵の具という素材によってどのように変化しているのかが、解らなくなる。

つまり、自然界にある光の姿を人間の頭でもって〝概念化〟してしまうと、色彩の持つ〝光〟の要素を見失う。……という事実が見過ごされてしまう。ことになる。

これは勿論、ここで述べている内容を含みます。

だからこそ、〝概念化〟してゆくことで失われる〝光〟を、再び見出す試みが必要である。――と、強く感じるのです。

人は、大人になりながら、出来事を概念化する方法を身につけてゆきます。

なぜなら、現実社会が、そのように作られていることを知る

からで、そしてそれが、社会を形成してゆく上で必要なことである。と学ぶからです。

しかし……、そのことによって、失われてゆくもののあることも識ることになります。

これは、大人になりながら学んでゆく、人間にとっての課題であり、取りも直さず、自らの人生を通して負うことになる課題。――なのではないのでしょうか。

光の要素を失う――、という、観念的にのみ関わっていたら気づかれなかったであろう出来事に、〝生命感覚〟をもって関わってゆく……ことで、描くという行為は、どこまでも内面化されてゆくことになります。

つまり、そのことによって、〝生きる〟という、苦難を伴っ

た内的な出来事に出くわしてゆくことになる。

このときに――、

『光であったものが光を失う――とは、どういうことなのだ？』

という問いが発せられ、問いは、自分自身の内面に向かって突き進む自問自答する牙を持つ。ことになる。

一方、このような内的な問題に関わることなく、観念的に否生命的に、あるいは無感覚的にこの問いの前を通り過ぎるときには、問いの吟味は為されないまま、素材は絵の具のまま乗せられてゆくことになる。とうことになる。

このときの絵と、幼児の描く絵を混同することは見方の誤りとなる。ので、その点に触れたい。

幼児を含む子供の思考は、脳を経由して営まれる大人の思考より、はるかに直(じか)に素材に触れている。ことが考えられるのであり、子供の思考は、そこに素材の持つ〝光〟を見るからこそ、あるときに見て感じた記憶が、心の核に止まったまま、大人になってもなお消えることなく遺り続けるのであろう。――と。

子供の絵が天才であると言われる所以(ゆえん)は、感じたものを、感じたままに現している。ところに見出されるのであって、子供にとってそれはなにより自然なことであり、生きるために必要な喜びなのだ。

すると子供に、大人の喜ぶような絵を描かせようとすることは、この天才を阻害し、創造の芽を摘んでしまう。ことになりはしまいか。

子供が、本当に喜んで描くものを理解してゆくことではじめて、創造の芽は育まれ、成長、発展する姿を、見届けてゆくことになるのではないか。――と、

思考という、脳の活性化でもって世界を見るようなってゆく大人になってはじめて、

「光であったものから失われてゆく〝光〟とは、一体何であるのか？」という問いが発せられ、〝生きる〟という問題が生じ、……そこに辛苦が生まれる。（このときの辛苦は、飢餓やいじめといった外的要因による辛苦を指すのではなくて、勿論そのことも含むが、どのような状況にあっても生ずる、自分自身の中からやってくる内的要因のもたらす辛苦を指す）ことを考えると、

人間の人生そのものが、〝生きる〟という問題に、〝光〟を

求めてくるのではないか。

その答えとなるものを、宗教が、芸術が、求めるのではないか？

――が、しかし、この問いを見失ったとき、〝生きる〟という問題は、外的要因に渡され、自分の外側に問題を抱えるような格好になる。

……そして、この外的要因となされた問題が、人間に対して様々な悪戯（わるさ）をする。ことになる。

外的要因に置き換えられた〝生きる〟という問題が、本人に基づかない様々な幻影に姿を変えて、本人自らを変身させる。つまり、〝生きる〟という問題が、現実世界から切り離されて、様々な事件、事故、紛争などの社会的問題と結びつけられてゆく。ことになる。

（このことは、メディアの報道によって嫌というほど報される

ので、敢えて、取り上げることはしない。ことにします）

他方、内的要因のまま取り残されてしまった〝生きる〟という問題は、そこに問題を抱えるから、内的な牙で噛み砕かれることによって、問題の核心にある〝真の姿〟も、解き明かされる可能性を残す。ことになる。

そして、この、内的な作業の過程で、大人になって既成概念化されて見えなくなってしまった、幼児の頃に見ていた世界が……、輝きを取り戻すかたちで、現実世界を照らし得る光へと育ってゆくことになる。に、違いないのだ――。

〝生きる〟という問題はそうして、その人の努力の成果として、辛苦という〝影〟の要素の中にある〝光〟の要素を見つけだ

す。

つまり、光である自然界の色彩を、光を失った絵の具という素材で描き現そうとする試みは、外的要因でない〝自分〟の中に、〝光〟となる要素を見つけだそうと試みる、どこまでも意識的な作業なのだ。

そして、この意識的な作業を通して克服されてゆく過程が、目には見えないが、素材を通して明かされるからこそ、人は、そこに、感動を覚えるのではないのだろうか。

自然の光は、人間によって一旦その光を失う。……しかし、人の内的営みを通して再び〝内的な光〟へと変換され得る。

という事実を、自然界の色彩は教えてくれているのだ。

＊

もし絵の具が、下にある色を損ねることなく重なり合うことができたとしたら、見た目には自然に近い輝きを描き現せるのかもしれない。

それは、テレビやＰＣやスマホのモニターのような、光線を利用した重なりのように――。

しかしそのように便利な絵の具ができたとしたら、先に述べたように、表現の内容となる意識的な作業が失われて、人は、〝絵の具という素材を通して意識を高めてゆく道〟を、見失う

ことになりはしまいか……と、以前より危惧していたが、近年のテクノロジーのもたらす限りなく視覚的な映像は、網膜の刺激を直接的に脳に伝達させて、人間の内的な作業を阻害し、得られる収穫物を奪っているようにしか見えない。のは、わたしの目の誤りであろうか。

網膜に受ける、外的要因が作りだす刺激は、人間の中から生じる内的なパワーを消費させるだけで、増やすことをしてくれない。

人は、外的要因の作りだす強烈な刺激に曝されると、自分の中に作り上げる内的イメージを見失うことになる。

つまりそれが、〝生きる〟というイメージ。

〝生きる〟というどこまでも内的な問題が、外的な要因に隠れて見えなくなる。

イメージとは、何かの大容量の情報を得たときに働くものではない。限られた素材を、他の素材と組み合わせたり、合体させたり、反発させたり……と、その情報を弄り回すときに湧き出してくる内的なパワーなのだ。

……では、〝感動〟とは、〝内的な光〟とは、〝生きるイメージ〟とは、一体……どこからやって来るのか？

自然界の色彩に目を向けるとき、そこには、前述したような内的な輝きを持つ色彩を観察することができます。

その姿は美しく、バランスが取れており、その美しさやバランスが、見る人の心の中に〝喜び〟という明るさを作りだして

くれる。……と、考えられます（もちろん、その人の感じる程度に応じて）。

つまり人は、自らの内的な喜びに明るさを感じるのであって、それは外的な光の持つ明るさよりも、はるかに親しいものです。

現代において人は、過去にあったような、偉大なる明るさにではなくて、より親密な明るさに〝光〟を求めるのではないのでしょうか。

自然が、人間の、この内的な作業によって汲み上げることのできる喜びを、無限大に持つ存在であるからこそ、人は、その出来事の中に、〝生きている〟という喜びを感じ、〝光〟という認識を得ることができるのではないのでしょうか。

……そして、この〝光〟に、自らの内面にある〝光〟が応えるかたちで、感動というものが惹き起こされる。のではないのでしょうか。

そして……、この自己の〝光〟の自覚とともに、人間であることの、意味の理解がはじまるのではないのでしょうか。

こうして、闇の中から現れ出てくる〝自分〟という光の認識の度合いに応じて、日々の、日常の中に生起してくる闇（不安）の正体が……、実は〝自分〟の映しであったことを、〝自分〟を認識する深さこそが〝光〟の正体であることを、そしてそれが、自分の力によってのみしか達成され得ないことを……自覚

するとき、日々の日常の戦いは、それまでとは違う、〝内的光〟を強化する機会と捉えて、〝生きる〟、積極的な意志に置き換えてゆけるのではないか。と思うのです。

――がしかし、日常における内的な作業は、日々に達成され、その成果（実り）を見ることが理想ではありますが、認識の際おこなわれる自問自答の牙が――諸刃（もろは）となり、自分自身を深く傷つけてしまうことにもなるのです。

つまり、このような意識的な作業を、日常の多忙な中に直ちに持ち込むことは、猛暑荒天の只中に、裸のまま身（み）を曝（さら）すようなもので、日常の中で早速そのことを実践しようとしても、無理が生じるのは火を見るより明らかであります。

そこで、まずは、日常から離れた意識の集中できる場所を見つけて（日常の雑多な出来事から意識の切り離せる場所であれ

ばどこでもよい）、一つのことに集中して、そこでの探求を進めながら、獲得された認識を、忍耐と共に、徐々に日常の中へと持ち込み拡げてゆくことができれば、それが、現実的な成果に繋げてゆくことになるのではないか。と考えます。（わたし自身、その途上、）

〝虹彩法〟は、スケッチという非日常の場所に身を置くことで、日常の雑多な問題から一旦意識を切り離し、囚(とら)われのない目で自然を観察してゆくことで、自然の持つ美しさとエネルギーに触れ、英気を養い、本来の自分に立ち返り、そうすることで、日常の出来事の雑多な絡み合いの中にも、必ず、解(ほど)ける糸口のあることを、自ずと、理解できるようになれるのではないか、と考えます。

〈虹の贈り物〉

自然の色彩を観察していると、自然界の色彩は、全体性の中に個性を現している。ということに気づかされます。

虹の色は、赤と、青と、黄色の三つの色によって現すことができます。（次頁参照）

このとき例えば、黄色を隠したときの……赤と青の関係。

あるいは、赤を隠したときの……黄色と青の関係。

更に、青を隠したときの……黄色と赤の関係。と観てゆくと、三つの色が揃っているときに感じるそれぞれの色が、どれかの色を隠すと、その性質が変わったように見える。もっと適切に言うなら、固有の輝きを失う。ことに気付かれないでしょうか。

実はこの図、もとは、ドイツの詩人ゲーテが考えた『色相環』という色の配置図で、それを虹の太陽にアレンジしたものです。

ゲーテは、プリズムを使った実験を通して、自然界の色彩の調和する姿を『色相環』という図にして示しました。

〝虹彩法〟を紹介したビデオと拙著「スケッチに行こう」に述べさせていただいているのですが、この『色相環』にまだ出会う前、主催させていただいていた子供スケッチ会に、お兄ちゃんだったかお姉ちゃんにくっついてきていた小さなお子さんの描いていた絵が、まさに、このようだったのです。

そのころのわたしは、〝虹彩法〟の説明を虹の形を模して説明していたのですが、その絵を見た瞬間、『これこそ、求めていた、自然界をなす色の姿だ！』と、直感しました。

その後に、ゲーテの〝色彩論〟に示された『色相環』を知り、それが〝虹の太陽〟に発展して、現在のわたしのイメージする、色とことばの橋渡しになっています。

この三つの色の性質の違いは、探求するほどに明らかとなります。

この虹の輪に、緑から紫に至る線を引いたとします。このとき右下の部分を隠すと、黄色からオレンジ色を経て赤に至る明るい色が現れ、反対に、左上の部分を隠すと、紫色から青を経て緑に至る暗い色が現れるのがお分かりいただけると思います。

そしてこの図に、先述した〝時の色〟の黄色からはじまる一日の色の移り変わりと、更にそこに、四季の変化をなぞらえてみると――、

一日の目覚めとなる〝時の色〟は……、新しい命の始まる若葉の芽吹く春の光の色に、

やがて木々の若葉は活発となる夏の強い陽射し〝赤〟の光を吸収してぐんぐんその色を深め……、

秋、懐深い〝紫〟の光の浸透の中に実を結んで、『実り』はやがて、星々の煌(きら)めく宇宙の深さのような〝群青〟に導かれて、深く〝青〟く沈む冬の眠りへと向かい、

そして深い眠り〝緑〟の中で、新たな目覚めを待つ。

このときの、春に芽吹く木々の若葉の色とは……、光の表現である黄色と、水の表現である青との共働の成果であり、

夏の太陽に焼かれてゆく若葉は、その中に熱の表現である赤を吸い込んで、いよいよその緑の深さを増し、

秋、三つの色は結び合い、実りとなり、

冬、実りは種を遺(のこ)し、溶け合う土の表現となって還(かえ)ってゆく――。

……それはまるで、人生の巡りのようにも見えてきます。

このように、ゲーテの考えた（発見した）色相環を通して表れてくるイメージを拡大解釈してゆくならば、この虹の姿とは、太陽の内的な顕れ（あらわ）を暗示しているのではないか……、と見ても、差し支えはあるまい、のではなかろうか。と、勝手に考えています。

更に――、黄色という色は、赤色という色は、青色という色は、先述したように単独で成り立つことができません。

つまり、他の二つの色との関係性においてはじめて固有の色としての自立性を持つ。――ことを考えれば、この関係が、個性をなすために必要な、最も重要な要素であり、個から全体性（宇宙）へ到る、唯一の認識を与えてくれるのではあるまいか。

つまり……、〝感動〟の、秘密なのではあるまいか。

自然の力は、この構成体を保持することを行うのではないか。

……と。

※ここに示した内容は、あくまで内的要因に基づく話しであります。

ところで、闇の色とされる〝黒〟は、この三つの要素が最大限に濃縮された姿である。とは考えられないでしょうか？

そのこともあって、わたしの主催させていただくスケッチ会では、なるだけ黒を遣わないように、進めさせていただいております。

＊

自然界の色彩は美しい調和に貫かれており、人は、自己の思考と感情という内的な力をもってこの調和の中に意識的に関わり、その体験で得た実りを携えて、再び何度でも、日常の現実の中に出ていって、内的な戦いに臨みながらも、その本来の目的である〝自己の光〟を強化してゆける。――と、信じて疑えません。

この日常の中こそは、自己の偏見や囚われの渦巻く、内的な世界の表れであり、僅かずつしか進んでゆけない〝試練の場〟であります。

しかし、色彩体験を通して会得される、『自然界に輝く色彩は、外なる自然ばかりを照らしているのではなくて、それは、自らに向けられた……扉なのだ！』という認識が、日常を取り巻く闇（不安）を、確実に照らしてくれる〝光〟になり得る。――と固く信じています。

青空の秘密は、緑の葉っぱの秘密は、その色彩の中にのみ記されてあり、人は、その内的な営みを通して、その神秘の扉の向こうにある〝光〟を証ししながら、自己の内面を強化しつつ、やがて全体に関わる者へと成長してゆけるのだ、――と。

二〇〇五年三月初版・二〇一一年三月改訂・二〇二二年八月再改訂

瀬﨑　正人